

## 温泉のまち・文学のまち・銅のまち

## 「松山 道後」

日差しがジリジリと肌を焦がす。気温はゆうに三十五度を超えている。松山空港に降り立つと、「坊ちゃんまんじゅう」、「坊ちゃん団子」、「坊ちゃん」；わずか数年の滞在でしかなかったのに、漱石のまちである。「坊ちゃんカキ氷」を探すが、どうもなさそうである。思い切つてなり切つてしまえ！と「坊ちゃん列車」に乗る。—— 停車場はすぐに知れた。切符も訳なく買った。乗り込んでみるとマッチ箱のような汽車だ。ごろごろと五分ばかり動いたと思ったら、もう降りなければならぬ。道理で切符が安いと思つた。たつた三銭である——と小説の中で評した汽車を模して、市電として走らせたのがこの列車である。ごろごろと十五分ほど動いたと思つたら終着「道後温泉駅」である。さて、銅のまち・道後に到着。

## 最古の温泉を銅屋根が飾る

明治の雰囲気ただよこの駅舎には、屋根、壁のフレイム部分に銅板が使われ、シックなたずまい。目の前の観光会館のバラベツにも美しい緑色の菱苜き銅板。道後と銅の期待が高まる。徒歩三〜四分で、お目当ての道後温泉に着く。



道後温泉本館



本館櫓の白鷺



本館裏手の銅板屋根

道後温泉は、日本書紀にも登場する三千年の歴史をもつわが国最古の温泉である。どうしりとした構えの本館屋根の櫓には伝説の白鷺をあしらひ、また毎日六時三〇分に太鼓の音で開館を告げるなど、歴史ある温泉情緒をかもし出している。脛に傷をもち苦しんでいた白鷺が岩間から噴出する温泉を見つけ、足を浸していたところ、傷は完全に癒え、元気に飛び去つた。これを見た人達は不思議に思い入浴してみると、爽快で疲労が回復し、病人も回復したことから、盛んに利用されることになったとか。本館二階は大衆浴場「神の湯」、二三階は「霊の湯」と休憩所、その奥には漱石ゆかりの「坊ちゃん湯」、さらに東には皇室専用浴室「又新殿」がある。二階へと上がる。驚くほどの急な階段は、手すりなしでは上がれない。ふと手すりを掴もうとすると、止め金ははぶく光る銅製。上がり切ると、数多いフスマの



観光会館の銅製バラベツ



坊ちゃん列車



ホテル椿館の銅笠木



道後温泉駅

本館前の露地をちょっと進むと道後公園に突き当たる。その懐に建つのが松山に生まれた俳人・正岡子規の世界を現代に蘇らせた記念博物館。盲目的に崇拜されていた芭蕉の俳句を文学のひとつとしてとらえ、これを大衆レベルにひき戻し、俳句の近代化と発展に尽くしたのはあまりにも有名なが、子規が「野球」の名付け親だというのは知る人は少ない。野球好きの子規は、当時松山中学校の後輩・河原崎碧梧桐や高浜虚子に野球を教え、当時ベースボールと言っていたものを「野球」とはじめて称したと言われている。幼名の「昇」にちなんで「野球」と言ったとか……。さて、この子規記念博物館は外壁の白地レンガに銅屋根を頂く。正面入口前に立つと門扉があまり見えない不規

## 子規の世界を蘇らせる銅

把手は使い込んだやはり銅製。温泉地で使われる建築金物は、耐食性にすぐれた銅が使われることが多いが、この金物は、ほとんどすべてが銅製である。

二〇か月の工期をかけて明治二十七年に建造された本館は三層楼。当初瓦と檜皮で作られた屋根は、昭和四十四年、防火上の見地から、霊の湯棟の全般、神の湯棟の振鷺閣および北面二階庇屋根、玄関破風棟の下屋庇屋根の檜皮苜きをすべて銅板に苜きかえている。従来の檜皮による屋根の厚みを変えることなく、〇二五ミリの銅板が使用された。その後部分的な補修をつづけ現在に至っている。瓦と銅の織りなす重厚感は見事につきる。とりわけ緑青銅屋根は夏の青空によく映える。この本館裏手にある巨大なホテル椿館も銅屋根がアクセントになり、モダンな外観をひとときわきわ立たせている。





子規記念館



記念館の「ホトトギス」銅鑄物の<スギトホ>門扉



万翠荘

石碑にみたてた俳句ポスト



則な格子状になつている。脇の説明パネルを見てなるほど。右からカタカナで「ホトトギス」と読める。俳誌ホトトギスの表紙のデザインをそのままもってきているという。これが重厚な銅製鑄物である。

強い日差しを避け木陰に入ると面白いものに出くわした。外観は岩に見える銅板を加工した「俳句ポスト」である。緑青が岩に見せている。これは子規・漱石生誕二〇〇年を記念して設置されたもので、観光地のあちこちに置かれている。だれでもここに投稿でき、優秀句は市の記念品がもらえるという。このポスト近くに県立美術館分館・万翠荘がある。大正十二年に旧松山藩主久松定謨が建てた別荘で、棟部銅板の美しいフランス風の建物である。これぞ大正ロマン……。

松山駅近くには、街灯、観光案内板、手すり、モニュメント等々、銅製ストリートファニチュアが多く目につく。駅の南五〇〇メートルほどのところにある「松山市総合コミュニティセンター」は、大きく文化・教育施設と体育施設の二つに分かれた市民の文化とコミュニティのプラザ。ここには多くの施設が寄り添っているが、そのうち「体育館」、「子供館」、「企画・展示館」、「研究棟」の四施設の屋根に銅板が使用されており、総量は約四〇〇〇平方メートルにもなる。とりわけ「子供館」のドーム型銅屋根は近隣のランドマークにもなっている。

### 究極の美を創り上げた “鬼師”の哲学

ここで松山を少し離れる。銅製建築金物を手がけ半世紀余、道後温泉本館の銅屋根への葺き替えにも参画された「鬼師」久保賀運氏をお訪ねした。松山から車で南へ三〇分余、大



松山市総合コミュニティセンター

洲市にある(有)久保板金工業本社。工場は、作品、試作品、材料となる銅板の山だ。寺院に使用されると思われる大きな「鬼」また「鬼」が来訪者を威圧する。  
——十七才でこの道に入り、五〇年。今考えてみると、この仕事は教わるものではありません。ひとつひとつ自分で工夫し、手づくりで作っていく。自分なりの方法を試行錯誤の中から見つけ出し、たくさんの方を蓄積していくことが大事だと思えます。大きな作品にはこのような自前の方法論がたくさん生かされているのです。「日本建築史書」の中で見つけた室町時代の「鬼」のデザインが面白いと思ひ、なんとか自分のものにしたつもりもしました。銅を長年使ってきたのは、何よりも銅が自分の思いを叶えてくれるから。銅板は、焼いたたいて、その繰り返しでよさが出てきます。自分の考えるよう



大洲領総鎮守神社



鬼師・久保賀運氏

に作り変えていきます。今の私があるのも銅があったからともいえます。  
——昨年、日本銅センター賞を受賞された同氏の技術力の背景にはこのような理念があったのだ。  
大洲から松山にかけての神社仏閣の屋根はほとんど同氏が手がけたもの。そのうちの三物件を案内いただく。総社大明神——〇・四ミリ厚の銅板を使ったこの屋根は葺き代が小さく、その技術力がうかがえる。大洲領総鎮守神社——元禄年間に建てられた建屋にコケラ葺きの屋根が美しい。大有霊神社——室町時代の金物をそのまま現代に蘇らせた技術が異彩を放つ。  
さて、かけ足の松山・道後を訪ねた銅探訪の旅、目にした銅製品をすべてご紹介できなかったのが心残りである。



▲ 大有霊神社  
◀ 総社大明神社